

太宰府の文化財

424

客館跡(特別史跡大宰府跡) 朱雀3丁目

「令和」で注目された坂本八幡宮、大宰府展示館、そして大宰府政庁跡は、いずれも国指定の特別史跡・大宰府跡の中にあります。そこから約1km南に離れた西鉄二日市駅の北にも、同じく大宰府跡の指定を受けた場所があります。それが客館跡です。

客館は、外国からやって来る使節が滞在した館です。また外国へ向かう日本の使節も、渡航前や帰国後に利用した記録があります。日本からの招聘を受け何度も渡海を試みた唐僧・鑑真は、754年、ついに九州に上陸しますが、このとき鑑真を乗船させた遣唐使・大伴古麻呂(大伴旅人の一族。このとき副使)は、大宰府で朝廷への帰国報告をしています。記録はないものの、一行はこの客館に滞在したことが考えられます。

客館は、鴻臚館とも呼ばれます。福岡市の福岡城跡で見つかった博多湾岸の鴻臚館(別名、筑紫館)、大阪湾岸の難波鴻臚館、そして京都・平安京の鴻臚館などが知られており、これらを、船が着く海沿いの鴻臚館と都

に置かれた鴻臚館とに分けると、この客館は後者に位置づけられます。都に代わって大宰府で行う外交の舞台の1つであり、今も国内・海外から多くの人を迎える太宰府の歴史的な原点という意味でも、重要な史跡です。

さて、客館跡は保存整備工事を行い、今年4月に史跡広場としてオープンしました。ここは古代都市「大宰府条坊」の中にあり、東西南北に走る街路を同じ位置に表示し、街路に囲まれた1つの区画を広さがわかるよう芝生としました。客館は、この芝生区画を南東隅として4区画にまたがる、たいへん広い施設だったようです。また外国使節が使ったとみられる大型建物群や管理棟とみられる建物群の位置も表示しています。

この客館跡を調べていくと、中国・唐の都の客館と共通点があるようです。唐の客館は、北門を正門とし、これを入ると南に儀礼など行う場所(庭)があり、その東西に建物があったようですが、それは敷地の南に大

型建物があるこの遺跡状況とよく合致します。また、政庁や宮殿に向かう街の中央大通り・朱雀大路沿いに置かれたという点も共通しています。当時の日本や東アジア諸国は、唐を模範に制度や文化を取り入れていきますので、おそらく外交の作法も国家的に共通しており、このため客館の場所や内部構造も似ているのでしょう。

こうした学術成果をもとに、客館や街を復元したVRを制作し、公開しています。現地で日本遺産「西の都」アプリ(iPhone・Android対応、無料)を使うと、視聴できます。太宰府、そして日本の「おもてなし」の原点である客館跡へ、ぜひ立ち寄りください。

(文化財課 井上信正)



客館跡 (北西から)



VRによる復元図 (南から)